

年頭にあたり

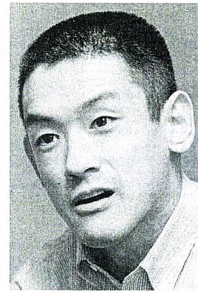
冷戦期間は停滞と模索の時代
 今年は「平成の御代」と「冷戦
 間期」が幕を下ろす一年である。
 振り返れば、平成の御代は実質
 上、米国と往時のソ連を軸とした
 「第一次冷戦」の終結とともに始
 まった。昨年、米中両国の「第
 二次冷戦」の様相がいよいよ顕著
 になったという事実によって、
 「平成の御代」の歳月は世界史上
 「第一次冷戦」終結以後の「冷戦
 間期」と呼び得る時期に重なるこ
 とになる。「平成の御代」の世界
 史上の位置を顧みることは、日本
 の人々には大事であろう。

エドワード・H・カー（英国の
 歴史家）が古典『危機の二十年』
 を著したとき、彼が叙述の対象と
 したのは、第一次世界大戦終結か
 ら第二次世界大戦勃発に至る20年
 の「戦間期」であつたけれども、
 二つの冷戦に挟まれた「冷戦間
 期」は後世、どのような評価の下
 に語られることになるのか。
 日本にとつての「冷戦間期」

日本は対外関与の積極性を示せ

は、「停滞と模索」の時節であつ
 たかもしれない。平成改元以降、
 日本が終ることになったのは、一
 つには経済上の永きに渡る「停
 滞」の歲月であるけれども、二つ
 には「力不足」で世界に向き合っ
 てきた姿勢が批判された故の
 「模索」の歲月であつた。

正 論



東洋学園大学教授
 櫻田 淳

カンボジアPKO（国連平和維
 持活動）への自衛隊派遣以降、近
 年の安全保障法制整備に至るま
 で、日本の安全保障政策展開は、
 日本が対外関与に際して抱え込ん
 だ消極性を克服しようという「模
 索」の表れであつた。そうした
 「模索」の意味を理解せず、日本
 の対外関与に際しての消極性を頑
 なに保とうとしたのが、従来日
 本で「平和主義」思潮と呼ばれた
 ものの本質であつた。

代」であつた。40年前に始動した
 「改革開放」路線が日米両国を含
 む「西方世界」諸国に与えたの
 は、中国が共産主義国家であるこ
 とはいえ、「西方世界」諸国に通じ
 る「開放性」を保持しているとい
 う印象であつた。中国は「西方世
 界」諸国の期待と誤解に乘じつ
 つ、「世界強国」に駆け上がるに
 至つたわけである。

に乗つた経済発展」「対中関係や
 対露関係における外交の幅」「日
 本に対する「専大・軽視」姿勢」
 といった当代韓国を彩るさまざ
 まな相は、韓国にとつて「安全保
 障は米国に、経済は中国に」とい
 う姿勢を取ることができた「冷戦
 間期」の時代環境の所産である。
 しかしながら、「第二次冷戦」
 の様相が顕著になった現在、中
 国に關して浮かび上がっているの
 は、彼らが「冷戦間期」のクロ
 ーバリゼーションの趨勢の中で世
 界に広がった「開放性」の果実を

食ひ散らす一方で、それを育んだ
 『自由・民主主義・人権・法の支
 配』の土壌を全く尊重していな
 い」という現状である。
 「西方世界」諸国での排除の動
 きが進む中国企業「華為技術（フ
 アーウェイ）」によって象徴され
 るのは、そうした中国の「果実を
 食ひ散らす」姿勢に他ならない。
 現下の米国の対中姿勢は結局、
 「中国が今後、『開放性』の果実
 を食ひ続けるのを許さない」とい
 うことを意味しているのである。

もはや韓国は西方世界の枠外
 また、特に文在寅大統領執政下
 の韓国は、対北朝鮮融和に走るあ
 まりに、日米両国を含む「西方世
 界」諸国同盟の結束を図ることに
 十分な熱意を示していない。
 折しも、昨年の年の瀬も押し迫
 った頃に、海上自衛隊対潜哨戒機
 が韓国海軍駆逐艦から火器管制レ
 ーダーの照射を受けた一件は、
 「西方世界」同盟網への関与に際
 しての韓国の誠意を疑わせる。
 この件は、従来の日韓関係を彩
 った歴史認識摩擦などとは異な
 り、軍隊同士の「衝突」の可能性
 を幾分かでも浮きさせたという意
 味において、その「敵対性」の度
 合いは桁違いに高い。しかもこ
 れは、米国にとつては、「自分
 （米国）の最も誠実な味方を背後
 から撃ち、同盟網に意図的に穴を
 開ける」振る舞いに他ならない。
 このような中韓両国の現状を踏
 まえれば、アジアにおける「第
 二次冷戦」の構図は、「第一次冷
 戦」の構図から米韓同盟の枠組み
 を抜いたものになる可能性が高
 い。

（文）（図）（表）

2019.1.9

